

『水は限られた資源』

『少雨傾向』、『ダム貯水率低下』、『渇水協議会』昨年の夏、テレビのニュースや新聞などでこれらを目にしたり、耳にした方も多いと思います。

しかし沖縄県（県企業局供給分）では平成6年3月以降、14年間断水が行われたことはなく、蛇口をひねると水が出るのが当たり前になっています。

もともと亜熱帯気候に属する沖縄は、1年間の平均気温22℃、年間降水量は約2,000mmで全国平均の1,700mmよりもかなり多くなっています。

では、どうして『ダム貯水率』が低下するのでしょうか？

それは、沖縄の気候と地形に特徴があるからです。

特徴1

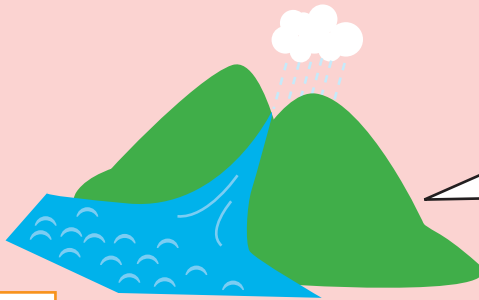
雨の降る時期は5～6月の梅雨の季節、8～9月の台風シーズンに集中し、各月の変動が大きい

年間を通して安定した雨量を得ることが難しい

特徴2

沖縄の川は長さが短く、傾きも急なので、せっかく降った雨がすぐに海に流れてしまう

豪雨による洪水、少雨による渇水の被害を受けやすい



沖縄は本土に比べて川の長さが短く海に囲まれているため、雨水がすぐに海に流れてしまう。

特徴3

沖縄は面積が小さく、人口密度が高い

一人当たりの降雨量は全国平均の半分より少ない量

そこで水を確保するため大切な役割を果たすのが『ダム』です。沖縄県では、水源の約70%をダムに頼っています。

現在那覇市で管理をしているダムはなく、那覇市内で使われる水は北部にあるダムから送られてきます。

気候に左右されやすい沖縄の水事情。

しかし、近年の気候変動で沖縄の降水量は－5%～＋10%の幅で変化すると予測され、台風の発生回数は減少するが、その勢力は強くなるという報告もあります。

これまでのように雨が降り、ダムに水がたまるのは難しくなる可能性もあります。

『水は限られた資源』です。

日頃から、水を大切に使う習慣を身につけたいものですね。



渇水時の新川ダムの様子
(写真提供：総合事務局北部ダム統括管理事務所)